

# 真坊と和尚さま

小川未明

青空文庫



夏休みの間のことでありました。

がき大将の真坊は、先にたつて、寺のひさしに巢をかけたすずめばちを退治にゆきました。

「いいかい、一、二、三で、みんないっしょに石を投げるのだよ、うまく命申したものが偉いのだから。」と、いいました。みんなは、目をまるくして真坊のいうことを聞いていました。

「はちが追いかけてくると、こわいな。」と、臆病な常ちゃんが、いいました。

「追いかけてきたら、竹の葉でたたき落とそうよ。」と、真坊が、いいました。

「ああ、それがいいね。」と、英ちゃんが、同意しました。

「みんなが、竹やぶへいって、竹を切つてこようや。」と、誠くんが、いいました。

「ああ、竹を切つてこよう。」

四、五人の子供たちは、寺の竹やぶへ竹を切りにゆきました。やがて、てんでに、手ごろの青々とした、葉のついている竹を切つたり、折つたりしてきました。

「さあ、これでいい。」

そういつて、みんなは、往來で石を拾つて、お寺の境内へ引き返してゆきました。「だれが、号令をかけるの？」と、誠くんが、いいました。

「まあ、待ちたまえ、僕は、それはうまいから、ひとつうまくあの巢に当ててみせようか？」と、真坊が、いいました。

原つぽで、野球をするときに、ピッチャーをしている真坊のことを、みんなは、だまつて聞きながら、承認しなければなりませんでした。

「命、中さしてごらん。」と、みんなは、手に石を握つたまま、真坊のするのを見ました。

真坊は、ボールを投げるときのように、片足を揚げて、高いひさしにかかっている、円いはちの巢をねらつて石を投げました。石は、まっすぐにひじょうなスピードをもつて、うなつていったが、巢はずれて、ひさしの板に当たると、大きな音をたてはね返りました。

この音が、あまり大きかったので、みんなはびつくりして、そこから、門の方に向かつて逃げ出しました。

「真ちゃん、だめじゃないか、こんど僕がうまく命、中してみせるよ。」と、英ちゃん

が、いいました。

「ああ、みんなが一度ずつやつてみようよ。そして当たらなかつたら、一、二、三で、いっしょに投げることにしよう。」と、真坊が、意見を持ち出しました。だれも、がき大将の意見に反対するものがありません。

「さあ、英ちゃん、うまくお当てよ。」と、ほかの子供たちは、英ちゃんをはげましました。英ちゃんは石を握って、足音をしのんで境内へ入ってゆきました。そして、上を見て石を投げました。石は、太い柱に当たって、足もとへはね返って落ちたので、あわてて逃げてきました。

「こんど、誠くんだ！」

やはり、石は、うまく当たりませんでした。最後にいちばん臆病な常ちゃんでした。もとより、うまく当たりつこがありません。

「さあ、みんなが、いっしょに投げるのだよ。」と、真坊は、いって、

「一、二、三つ。」と、号令をかけました。

石は、散弾のように、はちの巣を目あてに飛んでいって、ばらばらと当たりに当たって、大きな音がしました。

すると、同時に、

「だれだ！」と、大きななり声がして、庫裏の方から、和尚さまが飛び出して来るけ  
はいがしました。

みんなは、大急ぎで、首をすくめて逃げてきました。

「明日、ラジオ体操にゆくと、和尚さまにしかられるかもしれない。」と、常ちゃんが  
いいました。村では、毎朝みんなが寺の境内に集まって、ラジオ体操をすること  
になつていました。

「わかりはしないや。」と、英ちゃんが、いいました。

「しかられたつて、こわくないね。真ちゃん。」と、誠くんが、真坊の考えをききまし  
た。真坊は、にやり、にやりと、だまって笑つていました。彼は、このあいだから、一  
人で、はちの巣に向かつて石を投げていたからであります。

「いいよ、しかられたら、僕だとおいいよ。」と、真坊が、いいました。

「真ちゃん、しかられたつていいのかい。」と、ほかの子供たちが、ききました。

「僕は、ゆかないから。」と、真坊が、いいました。

「真ちゃん、ラジオ体操にゆかないの？ 休まずにいくと、ご褒美がもらえるのだよ。」

と、常ちやんが、いいました。

明くる日、ラジオ体操に真坊の姿は見えませんでした。もう二、三日で、終わりになるのです。

ところが、いちばん最後の日に、真坊は、やってきました。友だちは、しばらく見なかつた真坊がきたので、そばへ寄つてきて、

「真ちゃん、どうしたんだい。ご褒美は、昨日みんながもらったんだよ。」と、いいました。

「メダル？」と、真坊は、つまらなそうな顔つきをしました。

「ううん、ミルクキャラメル。」

「キャラメルなら、ほしくないや。」と、真坊は、にやりと笑いました。そして、体操が終わって、帰るときです。どこから出てきたか和尚さまが、

「こら、真坊！ おまえのはここにある。」と、いつて、ミルクキャラメルを下さつて、真坊の頭をくるくるとなでられました。

このとき、真坊は、和尚さまの厚意をうれしく思つて、この後、はちの巣に石を投げまいと心に誓つたのであります。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「ドラネコと烏」岡村商店

1936（昭和11）年12月

初出：「台湾日日新報」

1936（昭和11）年10月31日

※表題は底本では、「真坊《しんぼう》と和尚《おしょう》さま」となっています。

※初出時の表題は「真坊と和尚様」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 真坊と和尚さま

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>